戎百福 橋物語

賑わいの橋、400年の栄華。

道頓堀に架かる橋のひとつ、戎橋。ほぼ400年の長きにわたって、「賑わいの街」ミナミと共にありました。今も昔も人々に愛され続ける戎橋の歴史を振り返ってみましょう。

木橋時代

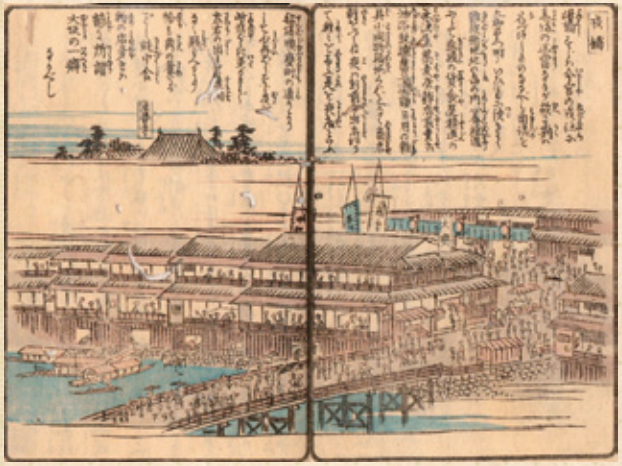
戎の社や芝居とのゆゆしきご縁

戎橋が架けられたのは、道頓堀の開削とほぼ同じ頃であったと言われます。開削が始まったのは慶長17年（1612）のことですから、ほぼ400年も前のことです。

「戎橋」の名は、「商売繁盛」を祈る今宮戎に向かう「参道」であったことに由来すると言われています。江戸時代の書物『浪華の賑ひ』<松川半山著、安政2年（1855）>には、「此橋（戎橋＝筆者注）すじハ今宮の戎社に参詣の正当なるが故に、斯ハ名づけしものなるべし」とあります。江戸時代の『絵本御伽品鏡』<享保15年（1730）>、『絵本十日戎』といった本にも、福笹を担げた今宮戎参詣の人々と共に、戎橋が描かれています。

暁鐘成の『摂津名所図会大成』には、十日戎の日、戎橋南詰に西宮戎の神像（絵像）を掲げた小屋が出て、西宮戎の信仰を広めていたことに由来するとの説も書かれています。いずれにせよ戎橋は、戎社・十日戎との所縁で名付けられていると言えます。

道頓堀という場所柄もあって、戎橋は芝居との所縁も深いものがありました。南詰には、竹本義太夫が



『浪華の賑ひ』（安政2年）
戎橋の来歴や周辺の繁盛を伝えている（大阪市立中央図書館所蔵）

『絵本十日戎』（寛延3年）
十日戎の日、戎橋も行き交う人々で賑わった（肥田晧三氏所蔵）

旗揚げをした人形浄瑠璃の竹本座がありました。竹本座はその後退転し、筑後の芝居、大西の芝居として歌舞伎の小屋となります。これが後の浪花座です。

明治9年（1876）の道頓堀の大火では、小屋が焼失。再建された際、座名を「戎座」と改めています。『絵本十日戎』では「しはいが見える」と櫓を指さしている人が描かれていたり、「しばいがはてたかしてたいこがなる」と注釈が記載されています。人形浄瑠璃全盛期には、戎橋も「操橋」と呼ばれたことがありました。

戎橋は役所が管理する「公儀橋」とは違い、橋周辺の町々で管理する「町橋」でした。記録が残る元禄7年（1694）以降、明治11年（1878）の鉄橋への架け替えまで、13回の修理や架け替え工事が行われています。橋の清掃や災害時の監視、行き倒れ人の始末など、橋にかかわるあらゆる負担は町衆によって担われてきました。まさに戎橋は、ミナミの街と共にあったのです。

明治に入る直前の慶応3年（1867）、戎橋は幕府の命令によって、「永成橋」と改名されています。「戎」という文字が外国人への蔑称に当たるためでしたが、結局人々に定着せず、明治3年（1870）には元の「戎橋」に戻されています。

鉄橋時代

行き交う人々の息遣い

（C）『大阪案内』より「道頓堀戎橋景」
多くの名所図を描いた広瀬春孝作（大阪市立中央図書館所蔵）

明治11年（1878）、戎橋は木橋から鉄橋に架け替えられました。長さは39.8m、幅は7.8m。欄干はX状に組んだ鉄材が用いられていました。

鉄橋時代の戎橋の姿を写した貴重な写真が2点。（A）は道頓堀北岸の久左衛門町から東を望んだ写真。左手の戎橋北詰に丸万北店（うどん屋）の幟が写っています。（B）は現在のTSUTAYA辺りから北を望んだ写真です。心斎橋筋商店街には日覆い（アーケード）が設置されているのが分かります。

（B）戎橋北詰の奥には心斎橋商店街の日覆いが続く（横浜開港資料館所蔵）

（A）鉄橋の戎橋（長崎大学附属図書館所蔵）

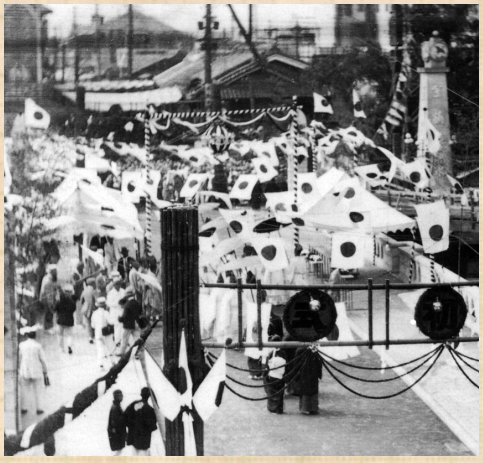
明治20年代に出版された『大阪案内』には、鉄橋時代の戎橋を描いた絵が2点掲載されています。1つは戎橋南詰東（現在のかに道楽）から北西を望んだ絵（C）です。南詰には人力車の寄せ場と交番が描かれ、北詰には丸万北店の煙突が描かれています。

もう1つは、戎橋北詰の宗右衛門町から南東を望んだ絵（D）です。ガス灯と共に北東角にあった渋谷時計店の時計台が、ハイカラの象徴として描かれています。南詰には「いろは茶屋」と呼ばれた道頓堀の芝居茶屋街、その奥に芝居小屋の幟がひしめき合っています。

（D）『大阪案内』より「戎橋北詰乃図」
対岸の道頓堀には、芝居小屋が賑わいを見せている（大阪市立中央図書館所蔵）

(B)戎橋北詰から南を望む

石・コンクリート橋時代
モダニズムを象徴した美観



(A)大正14年、晴れがましく行われた戎橋の渡り初め

大正14年(1925)、戎橋は橋梁耐震化事業によって石・コンクリート橋へと架け替えられました。長さ36.1m、幅10.9m、総費用は5万円。第7代大阪市長・関一の下で第2次市域拡張が行われて、大阪が「大大阪」となった年でもあります。優美なアーチ型デザイン、橋全体は花崗岩(かこうがん)によって化粧された美しさは、モダニズム時代のミナミを象徴していました。戎橋の渡り初めでは、橋が末永く親しまれることを祈って、南から北へ親子3代夫婦が渡りました(A)。

(B)は戎橋北詰から南を望んだ写真です。左右に完成直後の松竹座・丸万ビル、中央には戎橋とそれに続く戎橋筋商店街が配された印象的な1枚です。このアングルは、大阪を代表する洋画家・小出楢重(ならしげ)が描いた谷崎潤一郎の小説『蓼(たで)食う虫』の挿絵にも登場します(B')。

(B')小出楢重が描いた谷崎潤一郎作『蓼食う虫』の挿絵

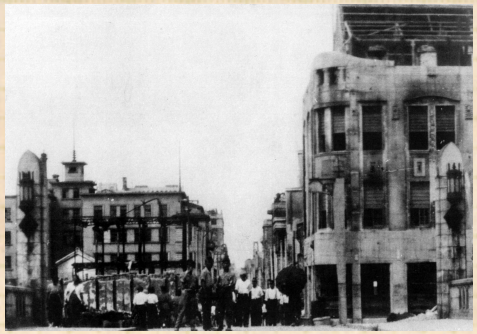
昭和12年(1937)、「大阪の大動脈」御堂筋が完成しました。(C)は道頓堀に架かる御堂筋の橋・道頓堀橋<11年(1936)完成>から戎橋を望んだ写真です。右側に道頓堀名物のグリコのネオンサイン(初代)が写っています。「赤い灯、青い灯」と歌われた道頓堀のイルミネーションですが、「道頓堀行進曲」が流行した3年(1928)当時は、電球に色を塗った「着色電球」でした。10年(1935)頃になると、次第にネオン管が普及するようになります。しかし戦争が始まり、14年(1939)には戦時市民生活運動の中で贅沢品として禁止されてしまいます。

(C)昭和初めの戎橋。現在も道頓堀の名物「グリコ」のネオンは初代のもの。イルミネーションが道頓堀の川面に揺れている

(B)高度経済成長期へと向かうころ、既に街は復興し、賑わいを取り戻している

戦後復興から平成の架け替えへ
過去と未来を橋渡し

第2次世界大戦によって、道頓堀に架かる橋のいくつかは焼け落ちてしまいます。しかし戎橋は石橋であったため、焼失を免れました。(A)は空襲後、戎橋南詰から北を望んだ写真です。心斎橋筋商店街の西側には小倉屋のオグラビル、奥には大丸百貨店が、右側(東側)には南海食堂ビルが写っています。



(A)大阪大空襲後の戎橋。橋は焼失を免れたものの、周辺は甚大な被害を受けた

(B)は昭和30年代の姿。街も完全に復興し、高度経済成長期へと入っていく時期のミナミを当時の広告が反映しています。後にナンバー一番となる当時の太平マート(元の丸万ビル)から北を望んだ写真。心斎橋筋商店街のアーチが懐かしい。

平成19年(2007)11月22日、「平成の戎橋」として架け替えられた戎橋は、新たな生命を吹き込まれて現代によみがえりました。長さ26.0m、幅11.0mで、中央部分に18.0mの円形の膨らみ(広場)が設けられました。これは街と街、人と人とをつなぐ、橋渡しをすると共に、末永く「集いの場」として親しまれる願いが込められています。盛大に渡り初めが挙行され、北西・南東の橋詰に銘板も設置されました。

(C)平成19年、架け替えられた戎橋

戎橋は今も昔もミナミの賑わいの中にありました。ミナミを、大阪を、愛する人々の中に常にあり続けました。街と街、人と人、過去と未来を、末永く橋渡ししていくのです。

文・古川武志(大阪市史料調査会)

(D)平成の架け替えを機に、橋詰に設置された銘板